



東京理科大学 理工学部 建築学科

加藤 修平

空間とメディアのスケールを関係づけることでメディアの存在を体感し、建築内の移動に伴いメディアを体感的に変化させる。コンピュータの発達により様々なメディアの存在意義が問われている。CD や書籍が最たるものだ。しかし、それらのメディアは決して姿を消すことはない。それはメディアが持つ物質的な価値に一因を見いだせる。ここではその物質的な特性、アーカイブ・ブラウザの仕方などに着目して『メディア空間』をつくり、「メディア空間連続体」として建築化する。東京メディアコンバーターは異なる質が同時存在可能なメディア建築である。「メディアを体感する」ことに重きが置かれているため、メディアが変わるごとに空間が激変し、豊かな空間体験が得られる。



講 評

書籍から映像・音響、PCから講演まで、メディアの違いを洗い出すことでそれぞれにあった空間を作り出し「メディア空間の連続体」として建築化する。多様性が同時存在可能である単純な仕組みを持った建築を目指す。メディア空間という概念を建築的に捉え、それらの集合体として、また連続する空間の構築としての建築への試みである。垂直な吹き抜けや、大きなヴォイドのオーディトリウムと最上階を水平に貫通するシリンダー等、その空間の直列的接合によってアップビートのリズムを生み出し、「空間はメディアに従う」というかつてのモダニズムの「機能と形態」に対峙する新たな空間概念へ向けた挑戦的思考も感じられるきわめて刺激的な作品である。私自身、ヘルシンキで訪れたステーキンホールの「キアズマ」がふと甦り、マルチメディアとアートの織り成す不思議な空間体験がこの作品にも重ねて感じられた。渋谷という場所にこのような建築ができれば、大勢の若者に支持されるであろう風景も想像できる。デザインや空間構成の面白さもあり、実際に説明を受けてそのコンセプトの真意を聞いてみたかった作品である。

[審査員 柳田 富士雄]